

|             |  |
|-------------|--|
| 氏 名 (本籍)    | はり かい あや<br>針 貝 綾 (福 岡 県)                        |
| 学 位 の 種 類   | 博 士 (芸 術 学)                                      |
| 学 位 記 番 号   | 博 乙 第 2626 号                                     |
| 学位授与年月日     | 平成 25 年 1 月 31 日                                 |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当                                 |
| 審 査 研 究 科   | 人間総合科学研究科  |
| 学 位 論 文 題 目 | ドイツ近代美術工芸工房の研究<br>ー世紀転換期のミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房を中心にー |
| 主 査         | 筑波大学教授 博士 (芸術学) 守 屋 正 彦                          |
| 副 査         | 筑波大学教授 博士 (芸術学) 五十殿 利 治                          |
| 副 査         | 筑波大学准教授 博士 (工学) 山 本 早 里                          |
| 副 査         | 秋田公立美術工芸短期大学教授 博士 (学術) 天 貝 義 教                   |

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、欧米には新しい美術工芸運動が興ったが、ドイツもその例外ではなかった。著者はドイツ各地に Werkstatt (工房) の語を名称に冠した美術工芸の会社が相次いで設立されている事実に注目し、これらの諸工房が美術工芸の近代化の過程において「工房」概念を復活させることにより、ドイツ美術工芸を再興しようとしたのではないかと考えた。そこで、本論文ではドイツ近代工芸工房のなかでも、ドイツ工作連盟をはじめ、ドイツ近代の美術工芸運動において活躍する多くの図案家たちを輩出したミュンヘン手工芸連合工房 (Vereinigte Werkstätten für Kunst im Handwerk, München) とドイツ工房 (Deutsche Werkstätten) に焦点をあて、両工房が世紀転換期に美術工芸の生産・教育制度をどのように構築し、どのように発展させていったかについて解明することを目的とした。

### (対象と方法)

本論文は序章、第 1 章から第 3 章、結章からなり、主要参考文献表、資料集、図版が付されている。序章では研究の背景、研究の対象、先行研究について述べ、問題を輪郭づけている。第 1 章ではミュンヘン手工芸連合工房を取り上げ、1897 年に同市で設置された国際美術展小芸術部門のための委員会が土台となって同工房が創設されて以後、リヒャルト・リーマーシュミットやブルーノ・パウルらが活躍し、次第にドイツ国内の美術工芸部門を統轄する組織へと成長して行く過程を考察する。第 2 章ではドイツ工房を取り上げる。徒弟制度に支えられた同工房は優れた家具の制作と徒弟教育を行うに留まらず、仕事場と居住地が隣接していることを理想としてドレスデン近郊に田園都市ヘレラウを建設し、さらに同地の敷地内にドイツ工作連盟の事務所が置かれたことなど、ドイツ工房の活動について明らかにした。第 3 章では、工房における重要な機能である教育的側面に着目する。ミュンヘンのユーゲントシュティルを牽引し、手工芸委員会の委員としてミュンヘン手工芸連合工房の設立に関わったヘルマン・オブリストが 1902 年、ヴィルヘルム・フォン・デプシツとともにミュンヘンに設立した応用自由美術教育実験アトリエという美術工芸の学校において工房教育を試みていたこと、バウハウス初代校長グロピウスはデプシツと交友があったことなどを指摘し、国立ベルリン統一自由・応用美術学校のカリキュラムにも、ミュンヘン手工芸連合工房の工房教育の理念が受け

継がれた可能性があること、さらにバウハウスのカリキュラムとの類似性についても指摘した。結章においては、これまでの議論をまとめて、最後に研究の展望を示して擱筆している。

#### (結果・考察)

ドイツでは美術工芸工房がユーゲントシュティル期からバウハウス創立前夜にかけての世紀転換期の近代美術工芸運動において重要な役割を果たした。なかでもミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房は、万国博覧会やドイツ工作連盟をはじめとする同運動において中核となる組織となり、その共同制作者たちが、やがてバウハウス創立以前ドイツ各地の美術工芸学校において工房教育の理念を導入した可能性がある結論づけた。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の第一の眼目は、「工房」(Werkstatt)を名称に冠する美術工芸の会社が19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツ各地に設立されていることに着目し、これまでまとまった研究が行われていなかったミュンヘン手工芸連合工房の活動についてまとめ、ドイツにおける美術工芸運動における重要性を指摘したことにある。著者は19世紀末から20世紀初頭にかけての欧米における新しい美術工芸運動が興った中において、ドイツもその例外ではなく、各地にWerkstatt(工房)の語を名称に冠した美術工芸の会社が相次いで設立されていることに注目した点は慧眼である。さらにこれに基づき、ドイツ工房附属教育工房における教育に加え、ミュンヘン手工芸連合工房に関わった図案家たちの美術工芸学校等での教育の取り組みについてまとめ、ミュンヘン手工芸連合工房やドイツ工房に関わった図案家たちがドイツ各地の美術工芸学校等において工房教育の理念を普及させたことがバウハウスにおける工房教育導入の背景になっている可能性を指摘した点は評価される。

本論はきわめて実証的であり、万国博覧会やドイツ国内の展覧会などを対象として、同時代の美術工芸雑誌をはじめ関係文献を渉猟し、特にドイツ工房についてはザクセン州都資料室ドレスデン所蔵ドイツ工房ヘレラウ資料に基づくなど、丹念な調査研究に基づいて議論を構築している。その上で、ミュンヘン手工芸連合工房とドイツ工房を解釈の俎上に挙げ、両工房が美術工芸の生産・教育制度をどのように構築し、どのように発展させていったかを見事に読み解いた研究であり、我が国における当該研究の嚆矢と評価してよいものとする。

今後の課題としては、世紀転換期以前の美術工芸工房の在り方について、また一方で、第一次世界大戦後、ワイマール時代におけるデザイン史の展開との関連をさらに探求することが求められよう。

平成24年11月26日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。